

同人誌 (2016年12月号)

# 風狂

風狂の会

詩

老いた年金生活者の嘆き	なべくらますみ
映画	原詩夏至
風の記憶	長尾雅樹
道づれ	出雲筑三
鎌倉・獅子舞谷の紅葉	高裕香
声を思考する人へ	高村昌憲
光化門の魂の火	金得永

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（十三）	三浦逸雄
-------------	------

評論

小人閑居の弁	北岡善寿
詩人・作詞家・西條八十（四）	神宮清志

覚書

風狂の会 川柳忘年会報告	原詩夏至
--------------	------

翻訳

アラン『わが思索のあと』（二十九）	高村昌憲 訳
-------------------	--------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント（2016年11月号）

バスが到着するたび 改札口付近に整列する人たち  
口々に呼びかける 被災地への見舞金  
私はこの通りを気ままに歩いて行きたいのに  
ここへ来る前にもあった募金の呼びかけ  
行く手をふさぐ声にたじろぎ  
一枚の大きな硬貨を箱に入れ息をついた  
自身の見せかけにも近い善意と感じてしまったから

今度の駅では子供たちの甲高い声が追いかけてくる  
少年たちの胸に抱えた白い箱 チームの旗が翻る  
顔をそらし 知らぬ気に通り過ぎる人もいて  
少年たちは空振りのような気まずさに顔を赤らめる  
行く先々で求められる義援金  
隠れようのない駅前広場

気弱な私は仕方なく  
残っていた硬貨を募金箱へ入れた  
札を入れることもないだろうと  
一人 胸の内をつぶやき 答えを出して  
年金生活者という無力な者にはそれしかない

あの日にあった あんなこと.....や こんなこと  
あれもこれも失い悲しみだけが残された人の  
胸の内を少しでも明るませることができたら  
と私にできることはわずかばかりの応援  
間違えなく届いてほしい

朝の郵便局前に老人たちが たむろしている  
..... ああ そういえば今日は

\* W・B・イエイツ全詩集 老いた年金生活者の嘆き

恐竜が人を食う映画は  
眠っている  
ユウよ  
ココナよ  
おまえたちには  
まだ早過ぎてつまらなかったか  
身を乗り出す  
俺と  
おまえたちの母さんの狭間で  
気づけば  
おまえたちは  
おまえたちだけの  
夢を見ている  
そこでは  
恐竜は  
やっぱり恐ろしく  
人を食うのか  
それとも  
小鹿みたいに優しい瞳で  
人の愛撫に  
身を委ねるのか  
本当はいもしない  
恐竜退治の  
へりの轟音は  
右へ 左へ  
館内を飛び巡るが  
ユウよ  
ココナよ  
そこにも  
おまえたちを見守る  
俺や  
おまえたちの母さんの瞳は  
しっかり開かれているのだろうか  
画面では

ほら 今  
愚かな人間が  
恐竜たちに  
島を明け渡して  
海の彼方の  
自分の世界に  
遠い視線を投げて  
帰ってゆく  
俺たちも  
さあ  
そろそろ帰ろうか  
夢の彼方の  
画面の彼方の  
陽だまりの  
俺たちの世界へ

耳の底から

音にならない唸りの音

かすかな震える

意識の底から

全身を包み込んでしまう

晒された肌が

吐く息と吸う息の

からっ風が北上山地から

耐えなければならない

日常の風の音が夢を剥ぐ

生まれた時から知っている

風と暮らす法が

身をかがめて

背を丸める

季節が追っている

話す声は破れて

どうして耳が痛いのだろう

滑空して

渦巻き疾走して

気流は迫り上がる

身を固くした

存在すること

何処へ逃げれば良いのだろう

行き場のない足が

生きるということは

風によろめきながら

生命は吹き飛ばされまいと

佇立する

前を歩く彼は知らない旅人である

私は疲れていた

それでも彼のかかちを見て歩く

休憩スポットが見えてきたが

彼が通り過ぎてしまったので

頑張っ歩いて

すると彼はピッチをあげて離そうとした

何故か私もピッチをあげてしまった

彼は私の知らない人なのだろうか

もう本当に疲れてしまった

彼は何故あんなに元気なのだろう

前しか見たことがないのだろうか

感心するほど確実に歩く彼

ひきずっても一歩ずつ進むしかない

遠い点の彼 また一人旅が始まった

夕暮れやっど宿に着いた

女将が御連れの方が着いてますよと笑った

彼が私を気遣ってくれていたのだ

縁台にゆっくり腰掛ける旅の空

雲間からのぞいた夕陽が目にしみる

道は紅く染まり光っている

12月に入ると行きたくなる場所がある

鎌倉・天園獅子舞谷

イチョウの落ち葉で黄金の絨毯が続く

かさこそ かさこそ リズムよく

イチョウの枯れ葉を足にからませて

孤独な世界へ入る

二人で歩いても一人

仲間と歩いても一人

愛する 孤独な世界

私はどこからきたのだろうとか

どこに向かうのだろうとか

一人 哲学の道

上を見てごらん 真っ赤な紅葉を

一枚一枚 光浴びて

異なった色で天園を作る

かさこそ かさこそ リズムよく

落ち葉を足にからませて

天園を 歩き続ける

声に出す言葉は本来の合図の中で  
最も間違っ受けて取られています  
最も曖昧であっても最も感動的で  
最も騙すもので友情には最悪です

声は行動する者にとっても最悪で  
気分と感情の流れで不規則な命令  
回れ右！と規制し号令された声で  
自分自身を表そうとする者は独裁

慣例や風習を無視した自由な話は  
自然と口論への源泉になると言う  
ところが私が自分自身に言う声は  
他人に質問している様に私に問う

私は自分自身の思考の木霊を創る  
そして知覚する二つの孤独の中で  
豊かに発展した独白は思想になる  
野生の叫びと情動を押さえ込む腕

一瞬の声はやがて百年後にも蘇り  
未来の人々の中で曖昧でなくなる  
そこに声を書いて読む意義があり  
声が永遠を生きる唯一の道になる

闇を照らすローソクの灯がある  
こわくて寒くてふるえる手に手に  
ともし火は日輪となって世を照らす  
重く暗い冬を春に変えたのだ

道を照らす灯がある  
さびしく冷えた心と心に  
一人捧げた灯は共に照らして笑う  
明るみを愛する道を開いたのだ

消えることのない光明がある  
雨風にも負けぬ心の灯となって  
音もなく民主と正義を照らし  
平和のともし火は人類の光明となる

世の中を照らす魂の火がある  
露積山で 八公山で 光化門で  
心から心へとおのが光もて  
良心を照らす魂の火も踊る

\* 本作品の日本語への翻訳は金一男氏による。



三浦 逸雄 「イチョウの木のある道」 15号（油彩）



三浦 逸雄 「坂道の家」 30号（油彩）

晩秋のある日の午後、窓辺に座って煙草を吸いながら、前方にある五階建の集合住宅の上をゆっくりと流れる雲を見た。澄み切った青空を背景に千切れ雲が白く陽に映えながら動くのである。その雲には虫、鳥、獣、人の顔といった様々な形がある。それを人は面白がって眺めるのである。それを腹に沁み入る感慨をもって詩に書けば、有名な詩人になれることは歴史の証明するところである。それはともかく、宇宙の天体の中にあつて、上空に雲が流れるのは地球くらいのものであろう。天文学は進歩しているけれども、地球に似て草木が生え、川に水が流れ、町に飲屋のある天体は、まだ発見されていないようである。地球に生まれたことを、われわれは有難いこととしなくてはなるまい。と言ってみたところで、いまや有難いと言えない暴虐の風が吹いているところもある。そこに住む者は、地球に生まれてよかったとは思わないであろう。神仏に祈ったところで、死の危険は去りはしない。そういう状況を知れば、キリスト教徒なら恐らく、聖書の「創世記」にあるノアの洪水を思い起こすに違いない。そこを開くところある。

「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。

そして主は仰せられた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やはうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ。」

神は人間を造ったことを悔やんでいるという。人間は神に似せて造られたというが、それが悪いことだけに傾くのを見たら、神でなくても嘆くのは理の当然である。その拠って来たるところを聖書はこう述べる。

「神が地をご覧になると、実に、それは、墮落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。」

さて、ここにある「肉」とは何か。クリスチャンではない我が方の勝手な解釈を以てすれば、肉は何かを食べなければ形成されない有機体である。つまり肉に変わるのは食糧である。虫も動物も人間も、物を食べて血肉を作っているのである。そこから自然に生存競争が始まる。人口の増大に比例して食糧の消費が増大する。国の面積に似合った人口なら、うまく物を分け合えば問題は起り難い。しかし人間には虫や動物と違った高等な欲がある。自由という思想が正しく理解されればよいが、辺り構わぬ身勝手まで自由の範疇に含めてしまえば、どういうことになるか。弱肉強食である。経済は原始時代の物物交換ではなく、通貨によって動くようになった。そのお陰

で金融資本が経済を支配するようになる。資本主義体制を維持するためには金持が政治家になって、体制の基盤の強化を謀る。金持で弁が立てば民衆はついて来る。いつまで経っても金が仇の世の中は終ることはないようである。暴言を吐いても、それに拍手喝采する者はある。暴言は名言に変化するのである。聞く側の知性の欠如がそこにある。結局、何であろうと、金がなくては生きて行けないのである。世の中が悪い方へ傾く所以だ。ノアの洪水は神話に過ぎない。けれども文明の果てにあるのは、人類の滅亡ではないのか。便利こそ最高の幸福と思わせる文明。お陰で地球温暖化という世紀を迎えた。とって、自動車も飛行機も、巨大な客船、タンカー、さらに加えて福島のような原発のなかった時代に、今更戻ることも出来まい。幸いなことに宇宙は無限の空間だから、優れた科学技術を駆使して、もう一つの地球を製造し、諸民族をそこに移住させる手はある。しかし、このプロジェクトは実現可能であるにしても、二、三十年のうちに来るといえるものではあるまい。何千年、何万年先のことかも知れない。

楽観論とは言えないが、古代インドの哲学としてこんなのがあったと、帰化人の小泉八雲がジョージ・メレディスを論じた文章の中で言っている。

「現在の宇宙の未来と過去について、神学が教えるところは何か？ 途方もない時間の経過の中で、この宇宙は星雲状態に変わり、その状態からまた形が出来るのだ。数学的には宇宙を調節する力は過去に於て何百万回も同じ種類の宇宙を形作ったに違いなく、また将来も何百万回となく同じことを繰返すものと計算されているのである。現代の天文学者は皆こうした計算に基づく研究を承知している。科学が、どのようにして何千何万という太陽と、何兆もの世界を持った宇宙が交互に規則正しく生まれたり消えたりするかを我々に教える時 — 繰返して言うが、この科学が始まる前に、何千年もの昔、インドの哲学者たちが教えていたのと全く同じことを言っているのは、まことに奇異である」

こういう宇宙論に共感出来れば、地球がいつ消滅しようが文句の言えないような気がして来る。つまり、つまらぬことに気を揉むこともないという解放感すら覚えるのだが、にも拘らず、むしろその反動で日常の現実に息苦しさが倍加する効果を生むのである。グローバリゼーションということばが流行るようになったのはいつ頃であったのであろうか。貧乏人は麦飯を食べ、と政府要人が議会で言った時代よりずっと後であろうが、今ではそのグローバリゼーションの雲行きが怪しくなって、自国の利益を優先させるための保護主義が台頭し始めているようである。豊芦原の瑞穂の国は俄かに観光立国になって、独自の国益政策を進めようと目論んでいるらしい。どうも世の中の自由には動、反動の繰返しがあって、その運動の外には出られない仕組になっていると言うしかない。こうなると、現実から逃避できるのは、どうやら過去の中である。当方の古いノートには、前述のラフカディオ・ハーンが言及しているメレディスの詩の断片が残っている。

「彼女は笑わなかった／彼女は塩のように冷ややかに座っていた」

この二行が感銘を与えるかどうかは別として、彼女の座り方の比喻はインド哲学ほどでないにしても、些か奇異である。この比喻から、キーツのハイペリオンの中にある「灰色の頭をした

サターンが、石のように静かに座っていた」という一行を思い出さざるを得なかった。それぞれ必然性あつての座り方であろうが、主役の性の違いがものを言うのかも知れない。小人閑居の弁である。[完]

## 流行歌の終焉

その後はめっきり外出が減り、ほとんど仏間の隣の部屋でぼんやりテレビを見て過ごすことが多くなった。しかしテレビで流行歌を聞いていられないと嘆いた。あまりに言葉が下手すぎる。ついテレビを消してしまう。たしかにそれ以後の流行歌の言葉の貧弱さは、とても聞いていられないほどだ。それだけ西條の言葉は冴えていた。誰でもわかるやさしい言葉をつかっても、そこには香りがあり、詩があった。独り静かに部屋に居て、八十の胸に去来したものはなんだっただろうか。『私の履歴書』に次のような記述がある。

「ぼくは約二三年間、早大の教壇に立っていたが、昭和一九年の、あの学徒出陣の悲痛な光景ほどつよく胸に焼きついているものはない。紅顔のかれらが大隈会館の前に整列、教師たちを交えて記念撮影をした。可愛い微笑を湛えていたが、この優秀な学生の大半はそれなり帰らなかったのだ。さもなくとも、昨日一人、今日また一人、かれらが稲穂を摘まれるように、赤紙を貰って教室から影を消すのを見るのは胸抉られる思いであった。」

戦時を経験した者のすべてに、この感慨はある。しかし戦争に関わる深さと特質性において、西條八十には特別なものがあつた。南京入城の前日のむごたらしい大虐殺を目の当たりに見て、いつ自分がそのような殺され方をするか分かったものではないと、覚悟を固めたこともあつた。

「原爆の投下によって極端な人種差別の実例を見せつけられた」と書いて、八十は痛烈なアメリカざらいになった。戦前はアメリカのたばこ「チェスターフィールド」を吸っていたが、戦後は日本の「ピース」を吸うようになった。占領下「支那の夜」を接収しておいて、その使用料を一銭も払わなかったと憤っている。

一九七〇年五月一日に朝日新聞に掲載された詩が遺作となった。

## おお現代

たった一度の敗戦のために

「日の丸」の国旗も、

「君が代」の国歌も、

サムライ精神も、

「降るアメリカに袖はぬらさじ」と詠った

一遊女の心意気も、みんな忘れ、

うまれの国の仮名づかいまで満足に書けなくなった

オッチョコチョイの大和民族。

とぼとぼ歩く生き残りの老人の胸には  
大陸に、南海に花と散ったあの若人たちの  
勇ましい面影が、空虚な万歳の声が、  
いまでも閃き、鳴りわたり、遠くに消える。

それを嘲るように笑っている  
壁の、毒々しいパリまねびの口紅の広告、  
その下にうず高く積まれた  
色気ちがいの教科書、週刊雑誌。

Quo Vadis? おお現代!

今年、つまり二〇一六年七月一八日の「読売俳壇」に「カナリヤの唄口ずさむ沖縄忌」という俳句が載せられていた。ひめゆり部隊の少女たちが壕の中で歌っていたのは「かなりや」だった。戦争末期、近づきつつある死を前にして、多くの若者たちが西條八十の唄を唄った。「花摘む野辺に日は落ちて」と中国戦線の兵士たちは唄い、「花も嵐も踏み越えて」と唄って特攻隊の若者が飛び立っていった。そして迎えた敗戦、その後にわれわれが見たものは何だったか。物量に敗れたばかりでなく、精神まで骨抜きにされてしまった。アメリカナイズされた軽薄な文化に、物心ともに占領されたままではないか。

一九七〇年八月一二日西條八十は永眠した。七八歳だった。その夜午前一時ごろ嫩子が眠っている八十を確認している。いつも通りに起きてこないのに、二階に見に行ったら亡くなっていた。急性心不全である。その数年前に喉頭がんを患っていた。その前日には散歩もしたし、気が付いたら眠るように死んでいた。なんという引き際の鮮やかさだろう。八十は学んでよし、稼いでよし、遊んでよしという「生き上手」であるばかりか、「詩に上手」にして「死に上手」であった。

「長生きは不幸の始まり」とは、近藤啓太郎の名言だが、周りに迷惑をかけるほどの長生きもせず、とって七八歳という当時としては長寿といえるまで生きた。それもただ長く生きたのではない。詩人として作詞者として、上等な芸術から、大衆の流行歌まで、上下に幅広く作り続けた。人生において最大の難問である「愛」と「経済」、この二つから逃げることなく、またやりすぎることなく、存分に生ききったといえる。もっと端的に言えば「マネー」と「セックス」においてこれ以上出来ないほど、うまくやってのけた。

童謡では「かなりや」で日本最初のレコードという名誉を受け、歌謡曲でも「東京行進曲」でレコード初の大ヒットを飛ばした。そして西條八十亡き後、作曲の古賀政男はほんとうの作詞家はいなくなったと嘆いた。国民の誰もが唄い、しかも長く唄い続けられるような流行歌はその後

絶えて出てこない。映画の全盛期が昭和三〇年代をもって終わってしまったように、西條八十の死とともに流行歌の時代も終わったのである。もう二度とあんな時代はやって来ない。流行歌は西條とともに始まり、西條とともに終焉したのだ。いまや西條八十、野口雨情、サトウ・ハチロー、藤浦洸、中山晋平、古賀政男、古関裕而、服部良一は過去の人なのだ。もう二度とこんな天才たちは現れない。

## 「ヨナ抜き」もひとつの文化

永六輔作詞、中村八大作曲の「こんにちは赤ちゃん」を天皇皇后両陛下の前で、梓みちよが唄った。このとき芥川也寸志が新聞に一文を寄せた。

「天皇の前で歌われた八大調のホーム・ソングは、どちらかといえば純音楽の流れをくむ質的高さがある。世をのろい、涙を流すことしか知らなかったこれまでの流行歌は音楽の汚物だし、これを機会にこのような俗悪なものは一掃すべきだ。」

芥川也寸志は作曲家にして指揮者であり、戦後の一時期大いに盛り上がった「うたごえ運動」の推進者のひとりである。その参加者に熱唱された「仲間達」などの歌の作者でもある。「進歩的」といわれた文化人の一人でもあった。これはまさに良識派を代表する、典型的な流行歌撲滅論である。「上を向いて歩こう」「黒い花びら」「遠くへ行きたい」などの六輔・八大コンビの唄は、健全な歌として芥川也寸志の意に適ったもので、西條・古賀コンビなどの不健全な唄は音楽の汚物であり、こんな俗悪なものは一掃すべきだというわけだ。

「純音楽の流れをくむ質的高さがある」と書いているのは、中村八大の作曲した唄が、西洋音楽の七音階で作曲されていることを指している。ここで作曲について少し考えてみよう。作詞について散々やっつけられてきたのは、西條八十たちだったが、そのいっぽうで古賀政男ほか、作曲でさんざんバカにされ、バッシングを食らってきている。

その根拠の主たるものは、七音階ならぬ五音階で作曲されているからだ。日本人は伝統的に五音階の音楽に親しんできた。七音階の「ファ」と「シ」が、うまく唄えないので、それを抜いて「ドレミソラ」の五音階で作曲してきた。これを「四七(よな)抜き」と称して、クラシックの音楽家たちが軽蔑してやまない。四は「ファ」七は「シ」という半音の意味。じっさい歌謡曲の多くは、いまでもヨナ抜きで作曲されている。「ヨナ抜き」と一括して呼んでいるが、じつは「二六抜き短音階」も多く使われてきた。これは「ラドレミソ」という音階でこのほうがじっさいは多い。短音階が哀調切々たる心情をよく表すので、この音階を多用してきたわけだ。演歌はとくにそうで「津軽海峡冬景色」も、じつは「二六抜き短音階」である。飛鳥時代から伝わる「伎楽」「雅楽」そして平安時代に発展した「わらべ歌音階」、江戸時代に広く唄われた「都節音階」など日本の伝統音楽は、すべて五音階で構成されてきた。日本人には何とんでもこの音階が唄いやすい。七音階の音楽は明治以後に西洋から伝わり、官製の音楽となった。

演歌の原点となった「船頭小唄」を唄ってみると、一つの音が揺れるところが多い。それによって、いよいよ哀調を盛り上げることができる。西洋音階では音と音の間に二つの音が入っていると、一つの音しか入っていないので、その音を動かすことができる。唄いながら音がずり下がってゆく。こうなると合唱はできないし、まして和音は取れない。日本人の最も苦手なのが、二部合唱、三部合唱ということになる。ところがロシア人とか、ニューギニア高地人のダニ族などは普通に二部合唱ができる。民族の違い、文化の違いであろう。日本音楽がこうした音階をもっているので、ピアノはもちろんギターのようなフレットのある楽器では演奏できない。そこで明治時代の演歌師たちは、もっぱらヴァイオリンを使った。ジプシー音楽がヴァイオリンを使うのと同じ事情による。

五音階をそのまま、まっすぐに唄ったら味もそっけもない。そこで「ウナリ」とか「コロガシ」とか「小節を回す」といった技巧を凝らす。これはまた完璧であるはずの西洋音楽の音符には採譜できない。日本の民謡も同じで「江差追分」など採譜することは不可能である。

アフリカの民族音楽には、ハーフトーン（半音）どころか「クォータートーン（四半音）」という音が使われているものもある。それも転がしているのではなく、一つの音として長く引き伸ばして歌うことができるのだ。これまた西洋音楽の楽典にはない音である。小泉文夫によれば、七音階も五音階もひとつの文化であって、そこに上下を付ける意味はないという。さすが異端者の小泉文夫でなければ言えない言葉だ。欧米音楽信奉者が主流を占める日本音楽界で、この正論が陰湿な悪口の対象となり、五六歳という若さで世を去ってしまった。

三浦環という国際的プリマドンナが居た。「蝶々夫人」の主演をアチラのオペラハウスで歌ってきた。その三浦環が意外や意外、古賀政男のファンで、あるとき古賀に言った。

「古賀さん、あなたの歌こそほんとうの日本の歌ですよ。私は、あなたの歌に恋をしているの。日本にも、もっともらしい歌曲が出てきましたが、こんなの、みんなアチラのまねごとなのよ」三浦環も相当な異端者にちがいないが、アチラに長く暮らすと、日本の伝統の素晴らしさに気づくということがある。この言葉に古賀政男は励まされたと書いている。（『わが心の歌』）

その古賀政男の唄には、三拍子が多い。「影を慕いて」「人生の並木道」「誰か故郷を思わざる」「湯の町エレジー」等々これらすべて三拍子である。日本の歌には伝統的に三拍子はない。なのになぜ古賀に三拍子が多いのかというと、彼の不幸な生い立ちに関係がある。彼は少年時代に事情があって朝鮮半島に渡り、そこで商業学校を卒業した。その後日本に戻って商家に住み込みで働いたのちに、東京へ出てきた。韓国・朝鮮の唄は三拍子が多い。日本の民謡にただひとつ三拍子の唄がある。九州の「五木の子守歌」がそれである。この唄はその昔、加藤清正が朝鮮征伐に行ったとき、現地から連れ帰った工人が唄い始めたものだといわれている。在日韓国・朝鮮人のなかには、古賀政男を同胞だと思っていて、その唄に慰められてつらい差別の中を、生きた人も少なくなかった。

古賀政男はピアノが弾けなかったので、ギターで作曲した。流行歌の作曲家は、このような貧困育ちが多かった。服部良一はダンスホールでアルトサックスを吹き、少年時代にはチンドン屋

でクラリネットを吹いたこともある。古関裕而はピアノがなくてハーモニカで作曲した。これら代表的な流行歌の作曲家たちには、クラシック音楽の教養がなかった。それが音楽のエリートたちの嘲笑のまともになったものの、かえってそれが幸いしたといえる。なぜならそのことが日本の伝統である五音階の唄をつくり、一般庶民たちに親しみやすいメロディーを、数多く提供できたからである。

その後において五音階の唄がなくなったかという、そうはいかない。日本人には、まして一般庶民には、七音階を歌いこなすのが難しい人々が多い。「恋の季節」というヒット曲は「ピンキーとキラーズ」という先端的なスタイルで唄われた。ところがこの唄は小泉文雄によれば、「わらべ歌音階」という平安時代から伝わる音階が使われている。「忘れられないの」は「あんたがたどこサ」と基本的に同じであり「青いシャツ着てさ」は「熊本サ」と同じだという。さらには「こまっちゃうな」「ペッパー警部」「春一番」は、いずれもわらべ歌音階だったので人気があったという。こんな指摘をはじめて知って、驚く人は多いと思う。新しいスタイルだと思っ  
ていても、気づかないうちに日本古来の伝統の恩恵に浴していたことになる。

「ヨナ抜き音階」「二六抜き短音階」という五音階の音楽は、日本から朝鮮半島、蒙古、中央アジア、シルクロードを通過してトルコ、ハンガリーにいたるユーラシア大陸に広がりをもっている。さらにはスコットランド、アイルランドにも同じ音階の音楽がある。明治の初期に音楽教育をしようとしたとき、日本人は半音が唄えないので、アイルランド民謡とかスコットランド民謡の「蛍の光」「庭の千草」「埴生の宿」「蝶々」などを小学唱歌として取り入れた。古賀政男をはじめ流行歌の作曲家たちは、声明や清本、催馬楽に近いものまで取り入れている。さらにジプシー音階、インドの伝統音楽、ナポリ六度の音階まで生かしていた。古関裕而は無調の音楽も作り、前衛的な不協和音も使った。

西洋音楽を優れたものとしているいっぽう、邦楽・歌謡曲を低劣な音楽とするのが主流派である。しかしクラシック音楽がそれほど上等なのだろうか。五音階の音楽は古代から続いている  
いろな変遷をたどり、今に至っている。しかしゲルマン民族は数百年前まで未開民族だったが、急速にヨーロッパを支配するようになり、急成長した。ヨーロッパ各国が黒人の奴隷貿易で巨利を博し、さらに植民地経済で高度成長をとげた経済力をもとに、大きな文化の華が開いた。オペラもバレエも大編成によるオーケストラも、すべて植民地経済がなければ成り立たなかった。対位法とかハーモニーというのは、完成度の高い人類史上の傑作のひとつとなっていることは否めない。しかし高度成長にはヒズミがつきもので、人間らしさ、情緒、デリカシーといったものが犠牲になっている。我が国の千三百年の伝統のある音楽には、西洋音楽にはない優秀性があることを再認識すべきではないだろうか。

「官製の音楽教育や、教養としての洋楽ファンがまったく忘れて『伝統と現代』、『東洋と西洋の融合』の問題が、流行歌の世界では常に具体的に答えられている」（『歌謡曲の構造』）と指摘したのは小泉文夫である。クラシック音楽が全盛時代をすぎて、行き詰まりを指摘されて久しい。ジャズの手法を取り入れたり、新しい試みも以前からなされてきた。日本の流行歌も

研究され、見直される時がいずれ来るのではないかと考えるのも、あながち突飛とは言い切れないと思う。

歌舞伎もオペラもバレエもときの良識派からは、眉をひそめられていたのだ。小泉文夫がいうように「伝統と現代」「東洋と西洋の融合」を常に具体的に答えてきたことを発見し、どこか遠い国の音楽家が本格的に研究し、その優秀性を声高に主張すると、たちまちそれが日本に跳ね返ってきて、皆が一斉に見直すということもあるかもしれない。そうなると流行歌を軽蔑し、敵視してきた連中が「じつはおれは好きだった」などと言い出すという構図が見えてくる。

このような流行歌を「音楽の汚物」として一掃すべきだという主張がいかに暴論であるか、以上の説明である程度ご理解いただければうれしい。戦争に負けたからといって、そこまで欧米一辺倒になっていいというものではない。西洋音楽はもちろん優れた文化で、それを尊敬し勧めるのはいい。しかし日本の伝統文化を守る人と、それを支持する民衆を軽侮し、悪罵するのはいかなものか。

西條八十が最期に残した詩は、重い意味をもっている。そして流行歌の全盛期を支えた作詞・作曲家たちは、人々が考えている以上に、大きな歴史的仕事をしていたのだ。そのことが見直されるときもあるだろう。西條八十・古賀政男はいつもその中心にいた。（完）

風狂の会 川柳忘年会報告(平成二十八年十二月四日 吉祥寺永谷スペース40)

こんにちは。原詩夏至です。「風狂の会」恒例の年末川柳句会。今年も、大いに盛り上がりました。手順は、

(1) まず会場で事前に配られる無記名の詠草（詠題「ドン」36句、自由詠34句）から、各自がそれぞれ、これも無記名で3句ずつを投票。

(2) 詠題、自由詠ごとに全得票数を集計、上位から順に1位、2位、佳作各1句を選出。

(3) 但し、得票数が同じ場合は、参加者全員で決選投票を行い、順位を定める。

結果は、次の通りでした。

### 詠題「ドン」

第一席 ドンづまり行く手をさぐる小池知事 ますみ

「ドンづまり、即ちドンのいる所」——あっ、思わず、これも川柳になっていますね（笑）。いずれにせよ、「富士には、月見草がよく似合う」（太宰治）ように、「ドンには、伏魔殿がよく似合う」。逆に言えば、東京に限らず、世界のどこでも、「ドン」と呼ばれるあのラフレシアじみた巨大な妖花に、あんまり風通しのよい環境は禁物みたいです。「ドンづまりにはドンがいて伏魔殿」——あっ、そういえば、これも川柳になっていますね（笑）。

けれども、「ドン」の育ちやすい風通しの悪い環境は、逆に言えば、空気が重く澱んで、濁って、どうしても脳が酸欠の機能不全状態になりやすい。つまり、人々のやることなすことが、どうしても「ドン臭く」なり易いのです——或いは「ドン物」に。「貧すれば鈍す」とはよく言われますが、これは言い換えれば「ドンすれば鈍す」。大いに気をつけたいものですね。

第二席 ドンといわれ家へ帰ればたゞの爺 清志

観たのはもう随分昔なので細部は忘れましたが、映画「ゴッドファーザー」で、マーロン・ブランド演じるマフィアのボス「ドン・コルレオーネ」が最後に倒れるのは、確か、庭で孫たちと遊んでいる時。入れ歯を牙みたいに剥きだして「フガフガー！」とふざけている最中に「ううっ」と心臓を押さえて、倒れました。歳月が流れ、今、自分もまた孫のいる身になって、ふとあのシーンを思い出す時、何故でしょう、涙が溢れます。「ドン」などという殺伐とした、或る意味愚かな人生を選んでしまった一人の老いた男に、それは、何やら、奇跡のように平和な、幸せな最期とも言えたのではないのでしょうか。

佳作 今どきのドン是小粒になりけり 武彦

「大物は遠きにありて思うもの」——あつ、これも一種の川柳でしょうか（笑）。思えば、世界にも、日本にも、歴史上、少なからぬ「大物」たちがいました。いればいたで、うるさい奴らです。困った、しばしばはた迷惑な奴らです。でも、いなくなったらいなくなつたで、今度は淋しい、やるせない奴らです。「ガハハハ！」「オイッ、チミチミイ！」「ヨッシャ、ヨッシャ！」という、あの暑苦しい耳タコのダミ声……。でも、それが、無性に懐かしい日もまた、あるのです——あたかも、一族のまどいの中でパチパチと火の粉を噴き上げる、暖かい炉端の火のように……。

自由詠

第一席 迷惑をかける奴ほど長生きし 清志

例えば、この世がもし、かぐや姫にとっての地球がそうだったように、天上界で何かの罪を犯した天人たちがそれを償うための「流刑地」であるなら、刑期の短い微罪の天人たちは、長くは留まらず、早々に「出所」します。しばしば最も善き人々が最も夭逝してしまう、その理由は、或いは、その辺りにあるのかも知れません。

とはいえ、たとえ「流刑地」であろうと、「住めば都」というのも、また理。たとえ他人様にどんなに迷惑をかけようと、一分一秒でもいい、長くここにいたい——その思いもまた、それはそれで何かしら胸を打つ、芽生え始めた「第二の故郷」への「第二の郷土愛」なのかも知れません……。

第二席 バスの中 年寄りばかりで譲り合い ますみ  
〃 いたわりの席を譲られ歳悟る 雅樹

決戦投票をしても同数で、最後まで勝敗がつかなかった二句。その両者が、かくまで双子のように対をなす情景を詠んでいるというのは、何とも不思議です。

まず、ますみさんの句。「譲り合い」という暖かい輪の中に入れず、寒さと孤独をかこっているのは、或いは若い人たちの方なのかも知れません——たとえ、その寒さや孤独に、自分自身では気づいていなくても。

それから、雅樹さんの句。「いたわり」を柔らかな心で受け入れる境地に達した時、人は又もう一回り豊かな自分に、そして世界に、気づかされるのかも知れませんね。

佳作 勝つまでの演技だったと言ってくれ 昌憲

「勝つまでは、勝つために、盛んなパフォーマンスであざとく人目を引き、勝った後には、一転、長年温め続けた高邁な理想に剛腕を振るう」——そんな「まさか」の夢にしか、もう、希望は残されていないのでしょうか。確かに「勝つまでは、勝つために、盛んな揉み手と美辞麗句で好感をさらい、勝った後には、一転、長年狙い続けた利得や特権に一路邁進する」——そんな「またか」の絶望に、誰もが飽き飽きしているのも事実なのですが.....。

最後に入選・佳作以外に筆者が独自に選考した、名前入りの詠草を十句ずつご紹介します。

それでは、皆様、どうぞよいお年をお迎え下さい！

来年も、どうぞよろしくお願い致します！

☆ ☆ ☆

### 詠題「ドン」

- |                     |     |
|---------------------|-----|
| 一 ドンとはおもしろい生きざまひるの月 | 精一郎 |
| 二 気取り顔ジャンヌダルクか蓬の矢   | ふみを |
| 三 伏魔殿いつの間にやらドンが住み   | 善寿  |
| 四 解散と都議会脅し澄まし顔      | 雅樹  |
| 五 政治塾ドンの場合は宴会場      | 昌憲  |
| 六 鈍感の フリをして生く らくらくと | たか子 |
| 七 豊洲でて 小池にはまり ドンづまる | 筑三  |
| 八 小池でた なまずが迫る ドン市場  | 筑三  |
| 九 革命家ドン・キホーテも貫けば    | 詩夏至 |
| 十 先行けぬ ドンの前途も 運命か   | 裕香  |

### 自由詠

- |                      |     |
|----------------------|-----|
| 一 コンサート 入れ歯おさえて 歌うたう | 裕香  |
| 二 ひとり住む女の影みる夢の中      | 精一郎 |
| 三 大泣きの孫をあやして遊園地      | 詩夏至 |
| 四 これすごい だるま落としの ゴミ屋敷 | たか子 |
| 五 ボブディラン受け手が迷うノーベル賞  | ますみ |
| 六 かくれんぼ障子の穴へお見通し     | ふみを |
| 七 秋深し隣はデモで大騒ぎ        | 善寿  |
| 八 合衆国何やら悲し民主主義       | 武彦  |
| 九 そのことば当たっているだけ腹がたつ  | 筑三  |
| 十 詩に上手君はやっぱり死に上手     | 清志  |

(以上)



## 高邁な心

ところで、私はもう一度デカルトに戻らなければなりません。それというのも教義の一点として私が大きな結果を引き出したからで、そのことは殆ど知られていません。すなわち『情念論』の中で定義されている高邁な心が重要です。私は戦後の十五年間で、高邁な心という美しい言葉を何度響かせたいと思ったことでしょう。デカルトはその言葉を寛大さという言葉よりもお気に入り、それは実際に魂の活動よりも寧ろ均衡を表しています。そして恐らく私は、この短い教義から危険を伴う結果を引き出したようです。私は一度も歴史家になりませんでした。寧ろ私は、この本を読んでいたのと同じ時期に、私の糧を著者の中に求めました。著者が思考したのを知るには、別な風を知ることにしか出来ないと思われ、私には思われます。著者が如何に思考したかを知るのに人は細心になっていて、それが正しく思考されているかどうかを知ることでないのに私は驚きます。兎に角、今の私は近視眼的批評家をまさに馬鹿にしている、最早歴史家には全くなりたくないのは事実です。

『情念論』は、私が最初に本当の読書をしたものの一冊です。それは私の声しか聞かなかったと言いたいのです。その結果は名状し難い困惑でした。私は、同僚の一人と或る術学者が聴講者であった彼らの前で、この書物に関する講義をした思い出があります。彼らは皆、私が極めて単純に書かれていながら迷い、哲学者たちに向かって少しも書かれていないのを見て、驚いていました。そして実際に私が、大したことのないものと理解していたもので、もしも私が感嘆されていると言われているものをその書物から除けば、全ての部分が明瞭なのです。しかし全体として私は、全く遙か遠くにいました。私は頭の鈍さと共に、何時も何故迅速で断固として過ぎたのか、理由が分かりません。実際に私が〈高邁な心〉を読んで一つの観念として変わるには何年もかかりました。それは、人が自由であると知ること、自由になると確信されることを実感する、情熱とか情操の感情です。この〈高邁な心〉が決して自由意志を蔑ろにしないことを固く決心している表現を、まさしく発明していたとも私は信じています。実際には、それは削られた文章になって仕舞い申し訳ありません。しかしここで私は、デカルトを裏切っていないことを十分に確信しています。勿論、新しくて余りに生き生きした光に先ず全てが眩惑されても、私は殆ど気にしませんでした。感じるとは何であるのか、それを私に説明しようとした人は、少なくとも誰もいませんでした。最も平板な経験主義がこの地上全体を占めていて、感覚とは全く自然の儘の事実として受け取られていて、全てがそこから出発していたことを私は良く理解していました。私としては、そして私がそこから見詰めた限り、自然の儘の感覚は、感じられないことを反対に理解していたと思いました。更に、動物たちは少なくとも存在していることを拒否しているというデカルト的立場に導かれて、私は私たちの思考の最も低い部分は何も明らかにしていません。そして最も弱い意識が常に非常に高い意識になることを私は大胆にも主張しました。こ

の様にして私は現代の最も強い偏見に反対して行きました。そしてあらゆる方法で、私が全ての博士たちから厳しく批判されなければならなかったのは、私が無意識や潜在意識や識見やその他猿の哲学論文を四肢で歩いて崇めなかったからです。それには何らかの特別に大きな恐怖がありました。というのも慎重な精神には魂のこのメカニズムが余りに疑わしい、と私は何度も気付いたからです。しかしその様な明白な批判に対する最高の困難は、それに係わらないようにすることでした。

既に述べたように、私は道徳的判断を意味する言葉以外に、意識の言葉に他の言葉を決して許さない普通の言葉によって助けられました。そして人は非難されないなら決して自らを知らない、と時々考えるようになりました。このことは自分から離れることであり、それと同時に自分を認めることでもあります。というのも何か内面の葛藤によらないとしても、何故人は目覚めるのでしょうか。しかし、これらの展開は、私が恥ずかしく思った曖昧さに私を投げ入れました。それ故に無意識とは、普通の言葉が認めているように自分で判断しないものであると言わなければならなかったのでしょうか。それ故に道徳心の無い人間は、自分自身を知らないのでしょうか。しかし、道徳心の無い人間はいるのでしょうか。私が見た限り、全ての人間は自分の名誉と呼ぶ何かのために、自分の人生を危険に晒す準備が来ています。そして、人間が更に悪徳や犯罪を負わせられれば、それだけ益々名誉が屢々強くなります。以上の様に、私たちは自分の運命を思考して、麻痺する観想的生活を送る人々から遠く離れて行きます。反対に最も普通の人は、運命が告げられる前に、最も軽微な恥辱でも受け入れられないが如く立ち上がり、行動し、自らに危険を負わせて一身を捧げます。この様な人々は高邁であると言われていています。これはデカルトの権威と結び付いて、多くの注意力を当然受け入れるべきです。

英雄たちにも維持出来ない陣地のように、その時は善悪が地に落ちるのを人が見るのも本当です。何故ならもしも自分の危険に復讐するなら、それが許されるとか禁じられているとか、決して自問しないからです。その時の彼は、如何なる外部的存在への恐れも尊敬もなく、彼自身が独りです。その時は彼に逆らってははいけません。彼は善ではありません。英雄も悪の種子を蒔きます。一瞬毎に私は、英雄たちが人生の息吹を持つ限り何のものにも止められないことによって、私も全ての人々も死に脅かされているのを理解します。私は英雄たちを時々疑いますが、理解しているようにも思います。英雄たちは自分の運命を創るように強く主張します。決して受け身の態度を取りたくないのです。譲らねばならない必然性がある時でさえも、立ち上がる元になります。まるで不名誉は、全ての譲る場合にあるかの如くでした。もしもこれが英雄固有の自由意志を感じるのではないなら、一体何なのでしょう。人は低次の力に譲るや否や、魂を裏切るという意味でないとしても、モリエールが如何なる意味で人は自分の魂を裏切ると言ったのでしょうか。それは常に自由意志を失うことです。既に、殆ど何時も最悪です。そんなことは決して信じないことです。そんなことを信じる人々を馬鹿にすることです。ところで人間は、犬のように一個の砂糖を前にして美技を行うように出来ているとは決して信じないのを、私は沢山の証拠から理解しました。犬は、最も強くて快い匂いによって導かれます。犬は、匂いや色や音に感じ易

い繊細な機械です。それらのあらゆるものに誘導されます。人間は誘導されるのを拒みます。脅迫に負ける人間は、殆ど誰もおりません。私は、この高邁な動物が戦争を起こすのを見たことがありました。でも、動物が戦争を起こさないことも私は理解しました。そして動物には卑怯なものは何も無く、全て人間にあり、行いたいことがあっても決して行わないこと以外に何があるのでしょうか。それ故に自己の超克があります。本来の人間になる脱皮があります。魂と肉体は分離しなければならない、と私は言いました。人間と動物が分離しなければならない、と言うのも同じです。

この戦いは実感されます。それは最も激しい苦しみを引き起こします。しかしその勝利は、最も心地良くさせる喜びを与えてくれます。自由であることの幸福が唯一の幸福であり、内的奴隷状態は唯一の不幸というのは真実でしょうか。今ではそれ以上に言うべきことがあります。完全な奴隷状態は自分を何も認識しません。モロッコで両眼を潰されて挽き臼を回転させるために繋がれていた囚われた将校が発見された時、彼は全ての意識の光を失って長い時間が経っていました。将校が発見されたその時、私たちは大なり小なり勝利しか意識しなくなるでしょう。そして例えば、絶対的に服従するのであるなら恐怖は認識しませんし、それが経験というものです。恐らく、所謂純粹感覚に人は絶対的に服従しているなら、最早認識されることはないと考えべきでしょう。意識とはそれ故に、自由に疑うことにあります。しかし私は、私の仮説をそれ程押し進める必要はありません。自由意志による戦いが強制と理性によるあらゆる段階で、それ自身によって喜びと苦しみが混じり合った愛情になるのを、私は気付くだけで十分です。そして余り緻密にならずに、その時の苦しみは何時も一種の喜びによって照らされているとも言えるのですが、その代わりに共通した証拠に従えば、絶望で一杯になれば感情を奪ってもいるのです。彼の意識を助けることは、力強さと意義に溢れた表現になります。それらは一般の言語使用に戻って来ます。この様に描かれた人間は、高邁な心による激怒に従って真の人間、愛すべきも恐るべき兄弟になるであろうと考えさせるものです。情熱は全てが高邁な心ですが、自分を救うために絶えず活動を継続しているのであって、それなくしては腹を立てた人間は単なる動物であると気付かなければなりません。これらの感情の形態を書こうとすると、私は時々、愛や吝嗇や野心の真の活動を述べるのが可能と思いました。文学の中に入るには、哲学から出ることであったと言えるでしょう。私がまさしくその様に理解したのは詩人や小説家が、自分を認識する術においての最初で最後の師であるというのを長い間規則にして来たからです。私は敢えて言いますが、私が試みた人間描写と、哲学者たちが如何なるものであっても僅かな片隅で発案した理論との間には、最早接点はないのです。（完）

## 執筆者のプロフィール（五十音順）

---

### 出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

### 北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

### 金 得永（きむ どうくよん）

一九五六年大韓民国全羅南道新安郡生まれ。木浦、光州、ソウルで海を故郷に宗教に傾倒しながら育つ。一九七九年、光州教育大学を卒業。一九九一年、日本奈良教育大学大学院修了。一九九五年檀国大学校教育学博士号（日本研究）を取得。二〇〇一～二〇〇四年、日本の岐阜韓国教育院長に派遣勤務し、『古代からの韓日交流の歴史』出版。その後、『日本生涯学習都市フロンティア』、『日本の生涯学習まちづくり論』、『人性千字』、『教師のためのソ-シャルスキル』、『生涯学習まちづくり論』などを韓国で出版。

二〇一五年から日本東京韓国学校の校長として赴任。子供たちが幸せな世の中、教室の中の幸福条件を整備中。目に見えない教育にも力を尽くしている。休日は、日韓古代史を中心とした神社や寺院を巡礼。古代人と、自然との対話を試みている。「ジュリアを讃えて」の詩は日本での処女作である。

### 高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。葉の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日

本語の講師を務めている。

日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

### 神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近では視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

### 高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。学生時代に同人誌「遡行」を発行。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A&E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤志詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九六年に個人誌「パープル」創刊（四〇号から電子書籍）、同年「風狂の会」会員になる。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのパー）に、随想集『アランと共に（Ⅰ・Ⅱ）』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ（Ⅰ～Ⅴ）』『文明国の戦争で真の原因になるもの（上・下）』『神々（上・下）』『神話序説』『家族感情』『わが思索のあと（上・中・下）』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

### なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫻自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつぐら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

### 原 詩夏至（はらしげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努

力賞)、歌集『レトロポリス』(第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞)等。現在短編小説集『永遠の、地上の(仮題)』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齡知命に達した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半にかけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニアス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

三浦 逸雄 (みうら いつお)

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊(東京・銀座)、東邦画廊(東京・京橋)他で作品を発表する。二〇一六年は京都での作品発表を予定している。

(以上)

## 読者からのコメント（2016年11月号）

---

アラン『わが思索のあと』（二十八）：唯物論 詳しく書かれていましたが、私には難しかったです。人間を、五感・感情・精神・魂が支配していることは分かりました。唯物論が抽象的概念であると知りました。

詩人・作詞家・西條八十（三）： 西城八十のことを色々教えていただきありがとうございます。墓地の『亡妻頌』の詩碑に感動しました。「王将」大好きです。先日、フォレストの「絶唱」に聞き入りました。舟木一夫の歌う、西條八十作詞と知りました。他に、「夕笛」「花咲く乙女」もいい歌でした。

雑誌の座談会から（二）： 戦争を知らない私ですが、戦争体験者のみなさんが声を揃えて、反戦平和を唱えて、亡くなっていきます。家永氏の、惨禍の再現を阻止すること、私たちが選択肢を誤らないように努力することは、よく理解しました。ただ何にも行動できませんが・・・東洋金属工業のお話、そんなことがあるんですかと思いました。言語障害になるほどの初恋は、とても良かったです。

三浦逸雄の世界（十二の二）： 男の苦悩が伝わってきます。

三浦逸雄の世界（十二の一）： 静かに立つ女、内面が深いのでしょうか。

正しい子供たち： この頃の間人は恐くなりましたので、仕方がないけれど終連でほっとしました。『てぶくろをかいに』を思い出しました。人間ていいな！と思いたいけれど・・・

五感を思考する人へ： 五感が備わっているしあわせを感謝します。そこから喜び悲しみが生まれるのですね。

新宿支部敬老会： お元気で何よりですね。懐かしい祖国の歌と踊りに、初恋の子を思い出されて、楽しかったでしょうね。終連に感動しました。

道灌の予言： 悲劇の武将、太田道灌のことを知りました。ありがとうございます。

月兎： 発想に驚きました。月にいるのはあれは兎ではないという、権力者への批判に共感しました。

夢： 人が夢をみるのは儂いというけれど、夢を見続けるっていいですね。私も小さな夢をみています。

山みちを歩く： 緑の林、野の花、小鳥のさえずり、自然の残っている処にお住まいで、足がお

丈夫ですね。山みちを散歩されお元気で何よりです。私も野の花が好きです。無心に、そこに安んじている野の花にはとてもかなわないと思います。

(以上)

同人誌 風狂 (ふうきょう)

第29号 (2016年12月登録)

<http://p.booklog.jp/book/111633>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/111633>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト